

思春期男子登校拒否の事例 ——母親の自立と少年の再登校——

生田 純子

I はじめに

今日登校拒否という言葉は日常語として用いられるようになってきた。しかしこれを厳密に定義づけることはそう簡単ではない。登校拒否の関連語として用いられる長期欠席、学校嫌い、学校恐怖症、不登校、怠学、分離不安などそれぞれのニュアンスには微妙な違いがあって、実際、学校へ行かない、行けない児童生徒の心理療法やカウンセリングに携わっている実践者の間にもその見方、意味づけ、理解の仕方、内容のとらえ方に差異があり、結果として多様な定義づけが行われることになる。

確かに、不登校の状態、行動の記述については臨床家の間には比較的コンセンサスが得られているが、登校拒否の原因論、治療・指導論となると議論百出といつてよい。

登校拒否児たちについての最近の傾向として次のようなことを感ずるので述べてみたい。

第一は、登校拒否という語が市民権を得たと同時に「登校刺激は加えない」という考え方が、必要以上に受け入れられてしまったことである。

不登校現象が増え始めた頃は、学校に行かせることにこだわって、無理にも力づくで連れていったり、理由を追及したり、怠け・甘えとして責めたりすることが多くあり、その結果として一時的に本人が動くとしても、本質的な解決に結び付かないことが多く、場合

によっては、心に深い傷を残すこともあった。

このような問題があって、登校刺激は加えないほうがよい、という考え方が支持されたことにはそれなりの意味があった。

ところが、「登校刺激を加えない。自分から動き出すのを待つ」という事が、学校に関する一切の働き掛けをしないことと解釈されて、何もしない、ほっておくということになりがちで、それがまた別の問題を引き起こす事になった。

休み始めの混乱した時期に、「登校刺激はない方がよい」と言われた親が、その後、一年も二年もそのままにしている、という事が起こってくるのである。その間に、本人はずいぶん元気になり、買い物に出たり、友達とも遊べるようになってきても、「自分から学校の事を言い出すまでは」と一切の働き掛けをしない場合すらある。中学生は卒業になり、進路も決まらないまま何年も経っていたり、高校生であれば、休学や、退学になってしまう。中には「そろそろ学校に行ってみるかな」とか、「遠足には行きたいな」と自分の気持ちを表現する子もいるが、必ずしも言える子ばかりではない。

親や教師が子どもの変化を素早くとらえ、適切な働き掛けをしていかなければ、子どもは育つ機会を失ってしまうのである。

登校刺激はよいか悪いかの問題ではなく、どのような登校刺激をどの時点で与えるかが問われているのである。

これと関連して、欠席中の生活がいわゆる閉じ籠りではなく、学校の友達とも平気で外出し、遊ぶ事のできる子どもが増えたことがあげられる。小学生なら欠席していることに罪悪感が薄いことも考えられるが、中学生になっても学校のことさえ相手が言わなければ平然としていることができるという状況である。しかしこれは、ある意味では自分の欠席をどうとらえているか、周囲の者がどう受け止めているかの問題であり、学校教育に対する価値観の問題が加わってくる。そうした意識の変化が最近顕著になってきたのであろう。

次に三世代家族の問題である。一時は核家族の持つ問題が顕著であった。それは子育てにおける母親の過保護・過干渉の問題、父親の多忙さによる子どもとの接触の稀薄化などが中心で、今でも数の上では圧倒的に多い。しかし、最近では住宅事情が変わって二世帯住宅によって同居するとか、子どもの両親の親離れの問題とか、同じ敷地内に住む子どもの祖父母との葛藤などが中心である。現在、三世代家族として比較的多い母方の祖父母との場合、母親が祖母（実母）から精神的に自立せず子育てまで祖母に任せて母親としての役割を果たさなくなるという事例が多い。この場合、父親のタイプとしては、優しいが遠慮がちで主体性に欠けるか、或いは仕事に没頭して逃避するタイプが多い。こうした場合、子どもは様々な症状を示し、本来機能すべき両親の役割を取り戻すための無意識のサインを送ることになる。

核家族の場合、サインを受け止め、子どもの両親が中心となって夫婦としての自我の成熟を得て、家族が遭遇する困難に立ち向かって行く協力体制を作り上げるのが治療の目的になるが、「三世代」の場合、まず子どもの症状を通して自分たちの抱える問題に気付くよう、各世代へのカウンセリングを根気よく行うことから始める。また世代間の調整も不可欠である。これは核家族の事例に比べ、二倍のエネルギーを必要とするほどで、「三世代家族」は難しいというのが本音である。

最後に、きょうだいで登校拒否になる傾向があるということである。きょうだいで登校拒否をしているケースといえば「遊び・非行傾向」をすぐ思い浮かべる。ところが、文部省の学校基本調査の結果でも分かるように、長欠者の数は毎年増え続け、タイプも多様化し複雑化した。「無気力傾向」なら分かるとしても「神経症的登校拒否」「意図的な登校拒否によるもの」といった中に、きょうだいで登校拒否をしているケースが目立つようになった。まだ萌芽の段階であるが見過ごす事はできない。

現段階で考えられる発症のメカニズムは次のようなものである。

①父親の死亡・母親の就労という新しい事態で、家族の生活パターンが崩れ、お互いの心の整理もできないまま、やみくもに頑張ろうとしているとき、家族に問題と向き合っているゆとりが失われてしまった。

②価値観や人生観が多様化した結果、従来の固定した教育観では律せられない時代になった。

③家族といえども人間関係の絆が稀薄となり、育児に意欲が持てずに放任し、親自身、生活に張りを無くし、自分の快樂追求に走る傾向が見られる。

ここにあげる事例は、上にあげた最近の特徴をある意味では備えているが、2年半に亘る登校拒否を、学校との連携を密にすることで治療に成功させた例である。問題は家族中にあったが、母親一人がカウンセリングに通う事で変化し、それに伴って子どもも、父親も変わっていくのである。この事例を振り返ることで、思春期にある子どもが、自立していない親から、苦しみ悶えつつ自立を獲得して行くプロセスが理解できようし、学校のタイミングよい関わりの在り方も参考になると思われるのでまとめてみた。

II 事例の概要

この事例は中学1年の9月から登校拒否に

なった長男のA夫のことで12月から学校の勧めで相談にきた母親が、9回のグループ・カウンセリングを経て筆者の個人カウンセリングを長男の中2の7月から3年の3月まで受けた60回を纏めたものである。

A夫は、中3の1学期に2か月半程度登校したのみで再び欠席し、そのまま卒業に至った。しかし、卒業式には出席し、定時制高校を受験して合格後登校を続けているものである。

中学3年の担任は、治療者の知人であり、治療者が信頼を寄せたことから、母親は担任に対する心を開放し、担任の登校刺激を受け入れる気持ちになったことが再登校の大きな鍵となっている。

1 主訴 長男A夫(中学2年)の登校拒否

2 家族構成

夫……………50歳	高校教師	大卒
本人(CI)……37歳	専業主婦	高卒
長女……………16歳	高校1年	
長男……………13歳	中学2年	A夫
義父……………75歳	無職	元公務員

3 長男A夫の登校拒否発症から来談まで

A夫は小学校6年までは活発で学級委員も勤めたことがある。中1になって塾も自分で探して入り、学校の部活も頑張っていた。中間テストの結果も良かったのに、6月になると「学校がつまらない、お父さんのときは良かったの?」と聞いていた。部活の試合を見学しなかったことから、グラウンド20周のペナルティを2度も課せられて欠席する。

期末テストの勉強に深夜まで頑張って翌日の朝起きられず1日欠席する。

夏休み中、塾の特訓をクリヤーしないと9月から出られないのに、受けることができなかった。休み中は沈んでおり「学校も行きたくない」と言う。

9月、始業式に出席したのみで以後全休となる。

12月担任の勧めで相談にくる。

4 家族

夫は姉2人弟1人の4人きょうだいの長男として育つ。家族を大事にする人で、子煩悩。育児にも積極的に協力した。長女が荒れている時は、取っ組み合いもやって、腰を痛めた事もある。義母の話をよくしており、8年間寝たきりで(入院生活)あったのを義父と一緒に良く看病した。付き合いは多くないが、将棋を指す事が趣味で、今でも稽古に通っている。

CIは弟と妹の3人きょうだいの長女として育つ。20歳で、高校のときの先生である夫と結婚。病気の義母がいたので、実家の両親はこの結婚に反対した。義母を4年間看病した。

夫の仲間と家族旅行をすると3人きょうだいのようだとよく言われた。子どもっぽい、母親らしくないとよく回りから言われた。少し前までは、子どもと一緒に喧嘩していた。今は多少変わって、「包容力がついた」と思っている。実家の両親は、子どものために自分の生活を犠牲にする人である。CIは子ども1本やりでなく自分の生活も大切にしたいと思っている。

長女は中3になって特に進路や勉強が元で、かなり荒れていた。余り勉強しないので、「勉強しなさい」と言う。「親の見栄や体裁で学校へ行くんじゃない」と口答えする子であった。学校では「明るい」と評価されていたが、家では弟や父親と取っ組み合いの喧嘩もして、CIは大層負担に思っていた。

私立高校への推薦が決まって落ち着いてきた。

義父はしっかりした厳しい人である。地域に溶け込むタイプではなく、一人で東京や京都の知人のところへ出掛けている。義母が8年間も寝たきりであったのを良く看病した。家の中では自分の気にいらぬ事は我慢できず、CIにとっては物の置き場所など勝手に変えられて、時々むっとすることがあった。義母は、CIが結婚したときすでに入院しており、4年後に死亡した。優しい人であつたらしい。

5 治療の形態

X年12月 初回面接

X1年5月～7月 グループ面接 9回

X1年7月～X3年3月（1年9か月）

個人カウンセリング（担当者Co） 60回

時間は1回50分～60分

方法は来談者中心療法を基本とする。

その間に中3の担任と3回面談する。

III 治療の経過

第1期 家中が変わり始めた

（X1年7/14～12/15 #1～#16）

A夫の生活内容は大体ファミコンとマンガ、友人と一緒に遊び、ゲームセンター、高校野球や相撲のTVなどで占められている（#1, 2）。A夫自身は登校拒否ではないと思っているようである（#2）。欠席は1年になるのにどう考えているのか分からない。深刻に悩んではおらず、誰かがなんとかしてくれると考えているようなところもある（#4）。

A夫は登校拒否を始めても、余り反抗もせず友達が来ても会える。しかし先生には会えない。その割には先生の悪口を言ったり、学校に文句を付けたりしない。最近では自分でトレーニングをしているようだ（#11）。学校の話は時々出るのだが、聞くと怒るので聞けない。（#14）。学校の事を聞いたら、パイと席を立てていってしまった。その後シャツを捲って力こぶを見せた。7月の20日から体を鍛えているのだと言い、それが答えのようである（#15）。

CI自身の事。A夫が登校拒否を起こす前くらいまで、子どもの母親仲間に勧められて卓球をやっていた。段々エスカレートして週3回くらいも出掛けていたが、それが負担になってきた。試合には出たくなかったのに、出なければ上達しないと無理やり出されたり、練習も自由にサボレなかったりで止めてしまった。しかし、最近体調が悪くなり医師の勧めで何かスポーツを、ということになったら

また卓球を始めた。今度は自分で好きでやっていると思うと苦にならない。卓球は好きだけれど、交際は負担になるということが分かった。（#2）

結婚の時に、支度は一切いらないと言われた。姑は入院中。ろくに新婚旅行もしなくて、新婚らしい夢もなかった。すでにある家の中へ身ひとつで迎えられ、なんでも言われるままにやってきた。家の中の物もCIの意思では動かさなかった。子どもの衣類一つでも義父が買ってくるので自分で買ってやれなかった。最近子供の身の回りの事をCIがするようになると、子どもが寄ってくるようになった。CI自身も、それまで小さい子どもを置いて外出しても余り気にならなかったの、母親になり切っていなかったと思った（#3）。

CIは20歳で13歳年上の夫と結婚して、17年になる。言われるままに何も分からずに従ってきたが、この頃何か鬱陶しくなってきた。かといって手に職もないので、近所の奥さんのようにパートで働くのも、人間関係が煩わしいし、拘束されるのが嫌いなので、すぐ引っ込んでしまう。自分一人で何か始めたいと思っている。以前陶芸を習いたいと言ったら、夫とA夫に茶化されて、プライドが傷付いた（#7）。

長女と塾の事で言い争ったことがあった。長女は中3のとき塾へ通ったが、余り勉強が好きでないので、高校へ入ったとき止めさせた。この頃勉強もしないのに塾へ行きたいと言い出した。CIが「卒業できればいい。成績はよくなってもらわなくてもよい。勉強もしないのに塾へ行く必要はない」と言うと、「お母さんが勉強しなさいと言わないから張り合いがない」と長女が言い返した。CIはカッとして「前のときはお母さんが勉強しなさいと言うから、やりたくなくなると言ったじゃないの」と叫んだところ、長女は腹を立てて、A夫に当たり散らし、「何時まではつきりしないの」とか「さっさと行動しなさいよ」などときついことを言った。A夫は黙々と夕食を食べ続け、CIに「お母さんがあんなに言

うとは思わなかった」と呟いた。長女は次の日から少し大人になったようである（＃9）

CIはA夫が登校拒否を始めた頃から、本を読んだりTVを見たりなどして、登校刺激を加えないでそっとしておくことにした。だから学校のことは何も言っていない。むしろ触れないように考え考え物を言っている。しかし最近では登校拒否のことをTVでやっていたのを一緒に見る事ができた。少しずつ変わってきた（＃5）。

CIも自分で変わったと思う。以前はあんなに嫌だった卓球の試合に出てみたくなったから。家族は驚いているが、自分では平気である。「だれでも変わるわよ」とうそぶいている（＃5）。

CIはこの頃言いたいことをずけずけ言うようになった。夫にも指摘されたので、生田先生が言いたい事ははっきり言ったほうが良いと言われたと弁解している（＃9）。

最近では長女も父親に言いたい放題である。先週は母親と言い合いをしたのに今度は父親とやった。父親のほうも長女の意見がどこかおかしいとは思っても旨く言えない。そういうことに慣れていないからではないか。

それに触発されたのか、夫も職場で会議のときに堂々と発言するようになったという。今まではほとんど発言しなかった人が意見を言う、皆がシーンとなって聞いてくれて、意見が通ってしまったとか。仲間に「少々過激だぞ」と注意された事もあるらしい。

夫と義父の関係も変わってきた。夫は以前のように義父の言いなりではなく、「今は聞きたくない」とか「そんな話は聞けない」などと文句を付けたりする。義父のほうも「聞いてくれるだけで良い」と譲ったり、「押しつけているのではない」と弁解している。

CIは聞いていて驚いている。一番変わらないうのはA夫である。一人置いてけぼりで、光っていない（＃10）。

朝のドラマの「ひらり」の親夫婦を見てみるとその気持ちがCIにはよく分かる。自分たちによく似ているから。A夫が登校拒否を起

こしたときは、CIの気持ちが動揺していた。結婚して17年間夢中で過ごしてきたが、気付いたらこのまま終わるのは嫌という気持ちや、今までの自分は何だったのか、何をしてきたのか、どうだったのか思い出せないくらい空白に感じた。義父はCIの両親とまったく違うタイプの人で、結婚前は立派な人だと思っていた。CIの両親は田舎風で、おっとりしていたが、義父は立派な仕事をしていて、ちゃんとした大学も出ているし、会ってみたら尊敬できると思った。しかし17年間にはいろいろアラも出てきた。夫と言い争いになったときも、明らかなごまかしを言っていた。夫もカッとして飲みかけていたお茶をぶちまけたりした。夫と義父は、もっと若い時にお互いに意見をぶっつけておかなければいけなかったのに、夫も我慢したり知らんぷりをして時を過ごしてきて、この年になってぶつかり合うのは義父にとっても気の毒だと思う。

CIはカウンセリングを受けるようになってから、何かしたい、とくに人のためになるような活動がしたいと思うようになった。小さい頃から、人には面倒を見られるほうが好きで、人の面倒を見る保姆さんや看護婦さんは、最も嫌いな職業であった。それがこのごろ人のためになることで、自分の生きがいにしたいと思うようになった。でも何がしたいのか分からない。夫はいろいろやってみて選べばいいと言ってくれるが、余りお金のかかることはできないと考えると、まだ積極的に動けない（＃11）。

長女の反抗期で家中の空気が変わってしまった。彼女は元来思ったことをすぐ言葉に出して言うほうなので、他の人がそれに触発されて家中が今までのやり方を考え直す時期になったように思う（＃12）。

夫はこの頃毎日のように職場で発言しているようだ。CIから見てもよく意見を言うようになったと思う。CIもこの頃ははっきり言う、回りから指摘されている。自分では左程とは思わない。以前から言うことがあれば言っていたと思うが、言う事が増えたのかもしれない

い。自分の意見があるようになったのかもしれない（#16）。

A夫は夜更かししてファミコンをした後、体が冷えるからと言って、父親の布団に潜り込んで寝ている。A夫と父親との関係は、普通の中学生の事を考えると旨くいっていると思う。以前には父親に対する反発はあった。例えば、父親の出た大学を馬鹿にしたり、どうして浪人しなかったのかなどと聞いたことがあった。夫は正直に、失敗した話もして、今の職業は自分の能力や好みにも合っている、後悔はしていないと答えていた。夫は内向的で、人との付き合い合いに疲れてしまうタイプである。その点はCIと似ている（#13）。

長女が定期テスト中である。最近勉強に目覚めたのか、よくしている。特に分からないところを夫に聞いている。それが実に楽しそうで、隣の部屋のA夫はどう思っているかとか気になった。

第1期のまとめ

この期では今までのA夫の学校のこと、現在の生活、現在の友人関係などが語られた。CIが指摘するように、A夫は自分の問題として考えていないようなところもみられ、「誰かが何とかしてくれるのでは」と期待しているような節もみられた。また、それに対してCIも、登校刺激を加えたくない、かたくななまでに学校のことには触れない。学校のことをどう思っているかという問い掛けができるようになるのに、カウンセリングを始めてから5か月近くも必要であった。

そして、この期は家中のものが今までのやり方を考え直す時期であった。CI自身もよく意見を言うようになったと自覚している。また、それを言いたいことを我慢していた記憶はないが、言いたいことが増えたのかもしれないと言うように、少しずつ主体的に考えようとし始めている。しかしそれはA夫に関してのものではなく、自分自身についてである。

夫も職場で発言をするようになり。自分の親との関係も逆転して、主導権を握ったよう

である。

長女について。彼女が中3でA夫が中1の1年間は、彼女のまるで疾風怒涛のような自立への欲求がこの家を揺さぶり、それぞれの心の中に眠っていた自己実現への欲求を目覚めさせたのである。そういう意味では、長女が母親であるCIに突きつけた親としての確固たる態度の要求は、CIに乏しかった母性性を目覚めさせるきっかけになった。

CIは17年間の結婚生活を振り返ると、何をしたか空白のように思えて、取り返しのつかない焦燥感に襲われる。CIの話を聞いているとき、イプセンの「人形の家」のノラを連想した。CIの場合、ノラのように家庭が破壊されるような自我の目覚め方でないようになれば、と考えた。

第2期 家庭内の人間関係への気づき

（X1年12/22～X2年3/23 #17～#26）

ここ2週間くらいA夫は父親と必死になってダイヤモンドゲームをしている。星取り表まで作って真剣そのものである。こんな事をするようになったのは、A夫が登校拒否を始めてからの事（#17）。

A夫は年末には友達と長島温泉へ遊びに行ったり、両親と一緒にズボンなどを買いに出た。正月には家族でトランプなどをして楽しんだ。A夫が高校のことをあれこれ聞いてきた。高校のレベルとか大学への進学率の事などについて、姉のことがあったのもっと知っていると思ったのに、まったく知らないのに驚いた（#19）。

1月末に友達がいったん帰宅してから部活に行くというのについて学校へ行っている。部活が終わるまで2時間くらい待っていたら、ほかの子もいて話をしていただらしい。

中学校の先生には会えない。プリント類は見せているが、どの程度読んでいるか分からない（#21）。

中学校から進級について呼び出しがある日も近いと思ってA夫に「どうしたいの?」と聞くと、「最悪の場合も予想してよ」とか「お

母さんの思うようにはならないかもよ」などと言って、自分の答えを言わない（#22）。

担任が訪問してくれた。A夫が進級したいと言ったのでそう伝えた。担任は親とも話し合いが持てない事に驚かれた。何か話そうと思うとプイと席を立てて行ってしまうから、と弁解した。長女はストレートに出すほうであるが、それをA夫はあんなにはなりたくないでと冷笑している。何かA夫の心の中に自分の決めた基準があるようだ。親としてはいろいろな生き方があっていいと思っているので、学校にこだわらないつもりでいるのだが、案外A夫の方にどこでなければ嫌といった思い込みがあって窮屈な思いをしているらしい。小学校以来の友人の中には、私立の中学校へ行った子もあって、皆塾へ行った。しかしA夫は嫌がった。あるいは自分は塾へ行かなくてもやっていけるという思い上がりがあったのかもしれない（#23）

子ども達はどちらも祖父とつき合うのが上手である。長女は祖父にも言いたい放題言っておいて、「おじいちゃんお茶欲しくない？」などと甘える。またA夫は自分の欲しくないものを祖父に勧められても「ありがとう」と言って受けとって、「おいしかった」などと言っている。祖父を傷つけないという気持ちがそうさせているようである（#17）。

長女は学校に内緒でアルバイトをした。飲食店のウエイトレスである。一番よく間に合う子だと言われてびっくりした。家では縦のものを横にもしないのに。しかし、生き生きとして学校のこと（2学期のテストで数学がよかったこと、部活の試合のことなど）を話しているとき、ストーブの前でA夫は何かしょんぼりと見えた（#18）。

最近A夫は自分のマンガを読みなさいと言ってCIに貸してくれる。犬の物語で、続き物である。古本屋で買ってくるらしい。読んでみると意外におもしろい。読んでいるとA夫がCIの側に擦り寄ってくるので困る。体を近づけるのは好ましくない。子どもが幼いときでも抱いたり、膝に乗せたり頬ずりしたりは

好きでなかった。しかし長女は母親の思惑などは無視して、膝に乗ったり甘えたりした子である。A夫は手の掛からない子で、あまり膝には来なかったように思う。むしろ母親の膝を姉に取られると、父親に甘えていたと思う（#20）。

CI自身も手の掛からない子として育ったように思う。人見知りもあまりせず、隣の織物工場の女工さんたちに可愛がられたり、親類の叔母さんの家に平気で泊まったりした。

夫は3人が仲よくマンガを見たり話し合ったりしていると、一人蚊帳の外で、つまらなさそう。いくら勧めてもマンガには拒否反応である（#20）。

義父は具合が悪くて検査入院している。頑固な人で夫も困っている。何でも一言ある人。最近夫が車を買って代えた時も、ほとんど不必要なほど細かい構造までセールスの人に質したり、古い車を廃車にするのに、かならず廃車にせよとくどくしつこく迫ったりする人。なんでも自分の思うようにしないといけいない人。敬老の日などにCIがプレゼントをすると必ず気に入らず、取り代えてこいと文句を言ったり、自分で代えて来たりする。感じが悪いので、最近はお小遣いにしている。「ありがとう」と素直に言えない人である（#22）。

長女はCIに毒づいたり反抗したりするのに、夫とは仲好くし、二人してCIを仲間外れにする。しかし、A夫はCIに甘えたり馬鹿にしたりするのに、夫には敵対するようなことがある。夫の学歴や職業について何度も「どうしてそんな大学に入ったの？」などと聞いている。夫はその都度「後悔はしていない」などと答えているが、A夫の学歴に対するプライドが高すぎるので今では誰も取り合ってはくれない（#24）。

修了式だが学校からは何もいってこない。多分進級できると思われる。先週の土・日に友達の家へ泊まりにいった。その子はA夫とは正反対の性格。割合ははっきりと自己主張し、粘りのあるタイプ。A夫はあっさりと見切りをつけて冷めているタイプ（#26）。

第2期のまとめ

この期になると、CIは家族の人間関係に注目し始める。一期のように家族一人一人がこれまでとは違って来た、という見方から一歩進んだと見るべきであろう。それはA夫の友達関係にも及び、プライドばかりが高くなって身動きのできないA夫の現状をかなり冷静に見詰めている。そしてA夫が自分の心を人に悟られないように、わざと無表情にし、無口になって身を守っているという事が推察できてきた。

#24では、エディプス・コンプレックスについてCIの方から尋ねられる。CIはA夫に「知ってる？」と質問されたのにCIは「知らなかったの」、Coが簡単に説明すると、二人の子どもの最近の家での様子がよく理解できる、と言う。A夫もエディプス・コンプレックスをどう克服していくかが課題であると思ったが、なぜこの言葉を知っていたかが疑問であった。CIは「夫の本棚から探して読んだのでしょう」とあまり気にしていなかったが、A夫が自分の悩みをなんとか解決しようとして、手当たり次第に本を読んでいるのではないかと思うと同時に、頭で理解するより実際の人間関係の中で解決してほしいと思った。それにはこのCIに残された問題がまだ沢山あると感じた。

また、CI自身の生い立ちから、CIが母親からあまり慈しまれなかったことが推測できる。人見知りもしなかったし、親から離れても平気だったなどで、母子関係が稀薄であって、それがCIの子育てにも影響していると思われた。自分の子どもを育てるのに、甘えさせ方も知らない。長女のように自分から積極的に近寄ってくる子は別にしても、どちらかといえば母親似であるA夫に対するスキンシップが不足していたことが推測される。

人が近寄ってくるのは好きではない、夫も子どもも側にきてほしくない、と言う。また、夫から「母親になっていない」とよく指摘されているように、CIにとっての課題は、今後

いかにして母性性を獲得するかである。さしずめ、マンガを読んでいるときのA夫の行動を受け入れる事から始まる。

第3期 再登校そして再び挫折

(X2年4/20～7/15 #27～#36)

担任はB先生。家まで教科書を持ってきてくださったが会えなかった。最近A夫の話題が変わってきた。教育問題のTVもよく見ている。夫が卒業生の進路調査の整理を家へ持ち込んでやっていると、それを手伝いがてら進学のことを聞いている。関心はおおいにある感じ(#27)。

B先生は3回も訪問してくださったが会えない。5月中旬の修学旅行への参加を勧めてくださった。同じ班の6人の手紙を持ってこられた。そのうち3人は知っている子。皆いい子で、先生が「今日も会えなかった」とがっかりして戻ると、「今に会えるよ」と慰めてくれるという話だった(#28)。

〈担任と面談〉

最近A夫が目立って変わってきたという友人たちの話。制服のズボンの大きいのを貰ったり、電話に出たり、今朝も「迎えに来て」と頼んであったり。母親は今まであまり学校へ来なかった。保護者会も欠席だったし修学旅行の説明会も欠席だったのに、先日「いつでしたか」と聞いてこられた。もう終わっていたが来てもらって説明した。A夫には行く気がないと諦めていたけど、3年生になると動き出す子もあると聞いたり、この頃変わってもきたので、という事だった。(A夫をどうやって学校へ誘うかについて打ち合わせる)

夕方B先生が訪問された時、初めて会えた。その後、家の近くでA夫の友達に出会ったので、「先生に会えたよ」と報告すると、「エ？」と驚いて走って家へきてA夫と何か相談していた。本当に嬉しそうで、こんなに喜んでくれる友達を有り難いと思った。それから二人で外出したが、どうも学校へ行ったのではな

いかと思われる。

今日が15歳の誕生日。「僕もボヤボヤしてはおれない」と言うのを聞いた。

CIは学校で修学旅行の説明を聞いてから、支度を始めた。A夫も黙ってみている(#29)。

12日から友達に迎えに来てもらって登校し始めた。初め教科書も持って行かなかったののでノートを取るだけで、パン代も先生に借りた。13日は旅行のカバンを持って行って(宅急便で先行する)2時間の授業を受けた。修学旅行は3日間で、班別行動の時に、同じ班の子が約束違反をしたので、班の子と一緒に罰を受けた。帰ってからB先生が電話をくださり、「よく話をして楽しそうだった」と言われてCIも嬉しかった。A夫はバスガイドがとても気にいったと話した(#30)。

修学旅行以後は登校したり、休んだりである。A夫は「30%は自分のため、70%は皆のために登校している」と言い、「自分は変に考え込んでしまう」と自覚もしている(#31)。

6月1週は一日欠席したのみで中間テストも受けた。しかし、テストの勉強は手が付かなかったらしい(#33)。

中間テストには間に合わないが、夏休みには勉強すると言っている。A夫は父親に、「休んでいたのが無駄になるようなことはしたくない」と言っている。この間、忘れ物を取りに帰り、時間がなかったので、運動場の生け垣の隙間から校庭に入ったら見つかって、生活指導の先生にこっそり油を絞られたという。しかし、担任の先生はまだA夫を特別扱いする、とクラスの子たちに言ってあると言われた(#32)。

登校は半々である。18日は朝家を出たのに学校へ行かず、友達の家でマンガを読んでいたという。担任が探しだして学校へ連れて行かれた。そのことで、生活指導の先生に昨日叱られた。それが分かっているのに昨日は平気で登校した。CIには何を考えているのかさっぱり分からない。「叱られてスッキリした」とA夫は言っている(#34)。

6月下旬は全部登校。しかし今日は首を寝

違えて休んでいる。「担任の先生が毎日書き取りをするので国語のテストは9点が取れた。英語の先生は好きだ」などと珍らしく先生の噂をするようになった。学校のこと、勉強のこと、欠席のことはボツボツ父親に話している。休んでいた18か月を短かったかと思っただけで、長く感じたCIの感覚とは大分ずれている。相変わらず勉強はしないが、父親との関係がよくなったことがCIには嬉しい(#35)。

7月初旬の期末テストは全部休んだ。父親に「期末テストは軽い気持ちでは受けられなかった。結果を見るのが怖かった」と話した。父親が成績にこだわらずマイペースでいけと心から思っていることが分かってから、父親はA夫にとって話しやすい人になった(#36)。

CIの話。先月修学旅行の支度をするとき、長女のスポーツバッグを貸してもらおうと思ったら、それをお友達にあげてしまったと言う。驚いて「どうして黙ってあげてしまったの?安いものではないのに」と声を荒らげた。長女は驚いて、自分の物だしいらないと思ったからとか、あげてはいけないとは思わなかったなどと弁解した。CIとしては長女のやり方が常々勝手だと思っていたので、「今度から自分のものでも、値の張るものは勝手に人にあげてはいけない」ときつく叱った。CIの態度は珍しかったのかA夫も驚いていた。結果として、A夫には新しく買ってやった(#31)。

担任が変わってから、CIは「学校ともしっかり連絡を取ろう、と思ったらA夫も学校へ行くようになった。修学旅行も行って欲しいと思ったら行けた。テストもそうだった。何か気持ちが一貫しているように思える」と言う(#33)。

第3期のまとめ

中3の担任は、初めての家庭訪問のときカウンセラーの名前を聞き「生田先生は忘れてみえるかもしれないが、以前指導を受けた」と話したらしい。Coも覚えていたので、知っていると言え、いい先生になってよかったと

心底思った。その事がCIの学校離れを食い止めただけでなく、もっと積極的に学校と連絡を取ろうという気持ちにさせたのであろう。

Coに対する信頼関係は十分できていたので、その人が信頼する担任ということで、CIにとっては初めての先生ではあっても全幅の信頼を寄せることになった。

担任や友達の根気よい誘いで、やっと修学旅行に参加できた。これはA夫にとって最大の思い出となった。しかし、それ以後期待したほどはかばかしくは登校できない。実際に長く休んでいたのでも体力的にも無理があったとは思われるが、A夫の気力がそこまで充実していなかったと見るべきであろう。

中間テストは「出席する事に意味がある」と自らを鞭打って登校したが、期末テストとなると自分でもそう甘くはないと思ったし、心の中には特別扱いを負担に感じる面もあったので、結果が怖くなってまた欠席する羽目になった。

A夫のプライドの高さはだれもが感じている。担任も友人も両親さえも驚き呆れている。しかしそれを現実のレベルにどうしても修正する事ができない。また、こつこつと遅れた勉強を取り戻す、という努力もすることができない。なぜこのような態度になったのか。

CIは確固たる態度で子どもをしつけたことがなかったのではないと思われる。そこで、A夫の肥大した自己像を、いずれの時点でも修正することができなかったのではないか。ただ自己中心的に考え、行動して来たA夫には、周囲を見て今自分は何を為すべきか、という現実吟味力が育っていない。他の人から指図されることを嫌い、自分の事は自分でやると他の干渉を許さない、一見自立しているようでまったく現実が分からないのであろう。

この期でA夫と父親の関係がよくなったことは望ましい変化であるが、ややもするとCIが逃げ腰になるようでは要注意であった。

また、スポーツバッグの事で、長女を叱っている。普通の家庭なら当たり前の事であろうが、この家庭では驚くべき事なのであろう。

以後、長女もA夫もややCIを母親として見直しているようである。

第4期 家庭内の人間関係の修復

(X2年7/27～X3年3/22 #37～#60)

A夫は7/15以来欠席している。終業式にも出なかった。通知表や宿題はCIがもらって来た。評価はオール1(#37)。

昨夜A夫が「どうしてお父さんとお母さんは結婚したの?」と聞いた。夫は「お母さんが好きだったから」と答えたが、自分は「今度結婚するなら別の人にする」と答えた。自分の結婚については後悔しているところもある。条件としては不足のない人であるが、今一つ好きになれない。以前は見えていなかったものが見えてきたのかもしれない。(涙が大きな目に一杯になり、頬を伝う。初めての事)

A夫が登校拒否をはじめたころは夫婦の仲は最悪だった。CIは子どもが育ったら別れようと思っていた。夫と一緒に暮らすのが嫌だった。もう寝室も別だし。3～4年前までは、子どもの関係の人達と交際して、結構楽しくやっていたので、夫婦の事は余り気にならなかった。A夫が登校拒否をおこして悲しかったが、夫に何かしてもらおうとは考えなかった。CIはどうしてよいか分からなかった。最近夫婦の会話は戻ったが、夫が「せっかく話をしたり顔を合わせたりしているのに、目を見ないね」と文句を言う。言われて気がついた。(面接の時はいつも真っ直ぐ目を見ている)

最初、結婚するとき実家の母親は反対したが自分は押し切った。だから意地でも実家では不満を言えない(#37)。

何か家族のためだけに暮らしているようで日曜日などはくたびれてしまう、自分だけの生きがいを見付けたい、本当にやりたいことは陶芸です。

CI自身は子育てが終わったら、何を生きがいにしたらよいのか判らない。時々結婚したのを後悔して、落ち込んでいる(#53)。

A夫とは9月始めから進路のことで話し合

ってきた。A夫は皆が行けと言えど嫌だけど学校へ行ってもいいと言って、CIにどうかと問い詰めた。CIは困って、「Aちゃんが学校で嫌な思いをしているなら別に無理してまで行かなくてもよい」と答えた。しかし、A夫はCIが頼むから学校へ行ってくれと言ってほしかったのかと後で悩んだ。次の朝、A夫の部屋へ行き、「お母さん考えたけれど、やっぱり学校へ行してほしい」とだけ言った（#39）。

A夫は小さい時から自己表現が下手だった。CIとしては可愛がったつもりだったし長女より手を掛けたつもりだった。しかし、中学校へ入ってもう大きくなったからと放り出したように思う。長女の反抗で気持ちがそちらに向いてしまった事もあった。寂しかったのだろう。CIがハムスターを飼って優しく話し掛けると、夫もA夫も文句を言う。焼き餅を焼いたのかと思う。以前迷い猫を飼っていた。CIが一番懐いて、膝によく上がっていたが、夫が嫌だったので、その猫が死んでからは猫は飼ってくれない。CIが世話をするのを嫌うようだった（#39）。

CIはA夫が中学を卒業させてもらったとしても社会人になれるか心配している（#40）。

学校からの進路に関する調査用紙を燃やしてしまった。担任が燃やした理由を聞かなかったのですか、と言われたが、聞いても返事はないか、しつっこくせまれば逃げだしてしまうと思う（#42）。

CIが「これからどうするの」と聞くと、「考えたくない」とA夫は答える。「でもタイムリミットよ」と言うとお母さん心配?」と言って、「そりゃ心配よ」と答えると「人並みだね」と馬鹿にしたようなことを言う。

A夫は山本五十六の伝記を読んで、尊敬すると言う。「お母さんはだれを尊敬する?」と聞くので、とっさに「生田先生!」と答えると「お母さんは言いくるめられているんじゃないの?」と冷めた失礼な事を言った。だから、「何も言いくるめられていない。話を聞いてもらっているのだ」と答えておいた（#43）。

学校には行けない。先日朝友達が呼びに来たときそのまま外へ出たが、夕方まで帰ってこなかった。一日中心配していたので、その事を言ったら、「へえお母さん心配するの?」と驚いたように言う。それ以来少しずつ打ち解けてきた（#44）。

担任が進路の調査用紙を持ってこられ、4日後に取りにくるからと言われた。A夫は「未定」と書いていた。就職はしたくないが、行ける進学先があるとも思えないのではないかと。

期末テスト欠席。CIとしては学校へ行っていたほしい。このまま時間切れで卒業になりたくない。少しぐらい酷でもはっきりと現実を見詰めて欲しいと願っている。（#48）

来週三者面談がある。いよいよ押し迫ってきた。A夫は現在昼夜逆転していて、夜中に食事を作っている。以前は絶対に捨てないと言っていたマンガ本を大量に捨てると言う。長女もそうだったが、何か心の切り替えをするつもりなのか（#49）。

CIとしては進路はA夫が好きなのところいいと思っているが、長女は「そんな風に言わないで。あんたの好きなようにいいと言われたら、見放されたように思える。あなたの決めたようでよいと言うほうがまだまし」と言う。親に心配してほしいという気持ちや、期待してほしいという気持ちがあるから、干渉は嫌だけれど、相談にはのって欲しいのだろう。でもCIとしては困る。自分のいいようにして欲しい（#50）。

三者面談へはA夫も行くことができた。A夫の希望は「専修学校」となっていたが、調理や理容が好きでなかったら駄目だと担任に言われた。また欠席が30日以上あるから私学も駄目で公立しかないことになった。二次募集を狙うか、定時制にするか二月までに考えておくようにという事で終わった。その夜自分の部屋で荒れていた（#51）。

A夫は父親とゲームをしていて負ける理由が分かったと言う。それは「お父さんのコマが自分のコマを飛び越えるとカッとなってしまうので負ける」と言う。「負けるのは嫌だか

ら絶対に勝てるのでなければやりたくない」と言った。夫はそれを聞いて、「勝負は負けたり勝ったりするもので、絶対負けない人はいない。第一負けない人とやる人はいない」と論じた（#46）。

A夫は父親とよく話している。卒業文集の原稿の締切りが来週であるがまだ書いてない（#51）。

テスト期間中なのか友達もこない。長女もテスト中。彼女は短大へ上がらないで、別の4年生の大学へ行きたいらしい。社会福祉士の資格を取って働くのだと、熱の籠った話をよくしている。そんな時A夫は話題の外で、自分の部屋へいってしまう。

A夫はこの頃父親を見直している。知識が豊富なことと、はっきりした考えをもっているからだろう（#53）。

最近ではA夫と長女の会話がスムーズになった。また一家団欒の中にも加わっている。会話が自然になった（#55）。

進路の三者懇談で、A夫は公立の普通科へ行きたいと言い出した。担任もCIも驚いた。一次募集の定員割れのところは内申点が9点では駄目だという事で、A夫はやはり定時制にするといい出した。始めに昼間定時制を受けすることにした。そこは落ちる人があるから勉強しなくては難しい、と担任が言われた。すでにその高校の説明会は終わっていたが、相談に行くことになった（#56）。

高校の説明会に夫と三人で出掛けた。夫は途中の喫茶店で待っていた。高校では勉強の仕方まで丁寧に教えてくれた。A夫は中座したり、顔色が悪かったりで、心配だったが、果たして、帰り道で貰った願書を川に捨ててしまった。その後2日くらいは沈んでいた（#57）。

卒業式には出た。式場でも皆と同じようにきちんと前を向いていた（#58）。

定時制高校の募集が始まった。夜間にするか、少々難しいが昼間にするかを家中で議論していたとき、A夫に「どちらにするの?」と聞くと、「大便と小便とどちらを食べるの?」

と聞いているのと同じ事」と言った。一同びっくりした。その例えが余りにも酷いので。しかしどちらも食べられない物を食べろと言っているのと同じ事と気づいて、一同シーンとなった。何時かA夫が、「定時制の子とオレと一緒にになれるか」と言ったとき、夫が、「以前4年くらい先生をしていたが、1/4くらいは真面目で本当に勉強がしたくて頑張っているのだ」とA夫の思いあがりをたしなめたことがあった。CIとしてはそんなに行きたくなければ行かなくても就職してくれればいいと思った（#59）。

A夫の希望が固まって、昼間定時制へ願書を出した。今日は公立高校の発表の日。一番の仲良しの子が、発表を一緒に見にいってくれと頼んだので二人で出掛けた。その子は落ちたら、A夫と同じところを受けると言う。受かっていた。A夫は「行きには暗い顔をしていたのに、帰りは本当にすっきりした嬉しそうな顔をしていたよ」とCIに話した。

A夫はCIに「お母さん僕に定時制に入りたい?」と聞いた。CIの気持ちを確かめることは今までにも何度もあった。修学旅行の時は「お母さん行って欲しい?」、文集の時は「お母さん書いてほしい?」、三者面談の時は「お母さん行ってほしい?」と言う。その答えがA夫の決心を固めるみたい（#60）。

第4期のまとめ

この期では、担任とは2回面談している。1回目は2学期に入ってからすぐで、また欠席が本格的になった頃である。このときは担任もA夫とは会えなくなっていた。あと1回は、進路についてのA夫の意思がつかめずに途方にふけていた頃である。

この期は、A夫も含めてCIが、家族の関係を見直している。まずCIの夫婦関係である。それはA夫のどうして結婚したの?と言う質問から発している。夫はすぐ、好きだったからと答えているのに、CIは今度結婚するときには別のパターンにしようと言ってしまう。そして結婚については後悔していると涙をこぼす。

Coの「いつ頃からですか」と言う問いに、A夫が登校拒否を始めた頃が最悪だったと振り返った。そして、A夫が登校拒否を始めたとき、夫に何かしてもらおうとは思わなかった。夫は帰りも遅く、家の事から逃げているみたいで、長女の反抗にもCIが一人で立ち向かっているような状態だった、と述べている。

そもそもこの夫婦は、結婚したとき、CIは夫の教え子であり、分からない事はなんでも頼って教えて貰えばよい、という関係であった。しかも、姑は病気で、家庭は夫の父親と弟という男ばかりの状態であった。後から考えれば、ていのよい女中のようなもので、何でもハイハイと言う事が聞ける女性が求められていたようである。CIはそれまでそんなに自己主張しない女性だったとは考えられない。結婚に反対する実家の親を押し切って結婚に踏み切っている事でも分かる。しかし、その後は人形のような性格を求められるままに演じてきたのであろう。

CIは17年経って、今までの自分の生き方に疑問を抱き、なんとかもう少し自分を生かした生き方がしたいと思うようになった。しかし、何がやれるのか、何がやりたいのかもはっきりはしない。そこの辺りの焦りがこの期では毎回のようには語られた。そして、子育てが終わったら別れたい、と何度も繰り返した。それだけにこのCIの混乱が大きかったのだと思われる。本当にやりたいことは陶芸ですというのも2度ばかりあった。しかし、今一つ具体性に欠けていた。お金のいることはできません、という事で焦点化することから逃げているのではと思われる節もあった。

A夫の登校拒否によって、CIはカウンセリングを受ける事になり、父親も本や講演などによって熱心に勉強し、親の在り方がやっと分かってきた。その頃から、今までほとんど会話らしい会話のなかった夫婦の間に会話が生じることとなる。

A夫は母親の愛情に今一つ確信が持てないので、しきりに「お母さん～やってほしい？」と聞くのである。しかし、CIの答えはいつも

A夫の求めているものとは違っていただかしい。この質問は、幼児がよく母親に発するもので、親の期待に応えたいと思う心理が働いているときのものである。嫌な事でも我慢して、親の期待に応えれば、親から愛情という報酬が得られると思えばこそ出る言葉なのである。しかし、この親は、あなたの好きなようにしなさいというだけなので、A夫は自分が期待されていないと思ってしまう。CIはCoの「本当にどっちでもいいのですか？」という問い掛けにも、ええというのみで、意見らしい意見は持ち合わせていないのである。母親らしい子どもの幸せを願う気持ちが薄いのではないかとさえ思わせた。

進学について家族と話し合う中で、この点をCIは長女から指摘されている。そんな言い方をされると放り出されたようだ。A夫は「どっちでもいいよ」と言われて、自分の考えを決めることができるほどは大人にはなっていない。また、「お母さん心配？」とA夫に尋ねられたことがある。心配よと答えると、「人並みだね」と言う評価である。A夫もしきりにCIが人並みの母親であってほしいと働き掛けているようであった。

進路の決定が迫ってくる頃、この母親もやっと自分の意見が言えるようになってきた。このまま時間切れで卒業ということにはしたくない、なんとか進学なり就職なり決めて欲しいと言うことである。

A夫と父親との関係が最も好転している。父親は根気よくA夫のゲームの相手をして、A夫の、負けるのは嫌、勝たなくてはやる気がしない、という我が侷な気持ちを旨くたしなめている。また、定時制に対するA夫の思い上がった考えもきちんと理由を付けて論している。この辺りはさすが教師という職業柄、堂に入っていると関心させられる。このような話ができるように二人の関係が熟していても言えよう。しかし、A夫の自己決定を促すような働き掛けはできていない。どこか一歩退いたような逃げ腰であるような印象は免れなかった。

長女とCIの関係は、すでに好転しかけていたのだが、この期では、CIの方もよき話し相手といった感情を持っているようであった。しかし、スポーツバッグの件以来母親としての権威は保たれている。

長女は、この家で一人自己実現を目指して着々と歩を進めている。その夢は熱く生き生きとしており、生きがいを求めて悩んでいるCIにとってはまぶしくさえある。そして、態度が決められないA夫の前では光って見える。

この様に、この期はA夫が再び登校拒否をしたことで、この家の中の人間関係についてじっくり考え直す時期となった。A夫の進路のことで、家中が自然に話し合った事が何度もあり、その事でそれぞれが自分の役割を意識したのではないか。A夫もその話し合いには加わって、今まで疎外されていたA夫の存在が取り戻されることになったのである。その後A夫は受験して合格し、かなり積極的に通学している。

IV 考 察

思春期に始まる登校拒否は、思春期までの発達課題が解決されていないために起こると考えられている。

エリクソンは乳幼児期の子どもでは、基本的信頼感が、青年期には自我同一性が、それぞれ確立されなければならないと言っている。登校拒否で言えば、思春期の登校拒否は思春期の発達課題が解決できずに、子どもの人格が一時的に混乱を来しているものと考えられる。そして、思春期の登校拒否には不安を中心とした神経症的な登校拒否が多く、その治療の困難さが指摘されている。

この事例は、思春期に生じた登校拒否ではあるが、閉じ籠りもなければ、親に対する激しい反抗もみられずいささか異なった印象である。しかし、相談を拒否したり、担任に会う事ができないなどは、いわゆる登校拒否らしいパターンであった。登校拒否をしているA夫に対する直接的な働き掛けはできないま

まに、母親に対するカウンセリングが行われて、母親を治療することとなったものである。

CIである母親にはA夫に負けないほどの問題があり、それらを一つずつ解決することが目標となった。

まず、CIはその生い立ちから見て、自分の母親から母性的な愛情を十分受けていなかったと思われる。人見知りもせず、後追いもせず、手の掛からない、すなわち手の掛けてもらえない子どもとして育った。この事は後の自分の子育てにおいて、重大な問題を提起することになる。すなわち子どもを抱いたり、頬ずりをしたり、膝にのせたりすることが嫌いな母親になったという事である。

CIは20歳で、13歳年長の恩師である夫と結婚した。夫は理解があり、優しい人ではあったらしいが、家の中には頑固で、自己主張の強い父親がいて、夫も主導権を取れない状態であった。その義父も、無理難題を言うタイプではないが、年若い嫁の立場からは何も言えない人である。17年間CIは言われるままに従って、自分の感情を抑圧してきた。始めの頃は、何も自分で決めなければ、返って責任を取らなくてもよかったので楽だったとさえ回想している。

長女が思春期を迎え、盛んに自己主張をしては、親であるCIの抑圧して来た感情を揺さぶったのである。CIと夫との間はすでに冷めており、夫婦の関係もなく、夫は忙しいと称して家にあまりいたがらない状態であった。長女の反抗はもっぱらCIに向けられ、言い募られて、ろくに意見も言えないCIは涙を流すだけで、何ひとつ積極的な解決策は講じられなかった。夫は見かねて、長女をたしなめようとするが、返って反撃に会い、取っ組み合いの結果腰を痛めてしまう。

長女が激しく自立への欲求を出しても、受ける親の側の反応は誠に頼り無いものであった。そのため長女自身も苦勞してやっと落ち着いて来たのである。その事をCIは、暫く経てば自然に落ち着くと理解して、A夫の問題のときもあまり積極的に動こうとはしなかつ

た。親がとやかく言わなくても子どもは自然に自分で分かっていく、というのが信念のようであった。しかし、この事は、子どもの自発的な行動を待つ、と言う隠れみので、親の対応を変えるという点がぼかされてしまった。

CIの自我は思春期の子どもよりも未熟であったが、A夫が登校拒否を始めた頃より、今までのやり方を変えたいと思うようになり、少しずつ自我に目覚めて来た。考え出すと自分の今までは何であったのか、何をしてきたのかさえも分からなくなってしまう。カウンセリングが進むと、Coに対する陽性の転移が起きる。今まで、仕事を持っている女性と話し合ったことがなかったので、Coと会うのが嬉しいとか、自分も人のためになる仕事がしたいと思うようになり、今までとは変わったと意識する。

それと同時に、自分の結婚生活を振り返り、一方的に人から動かされてきたことに気づく。さらにそれにより毎日の生活の中では自己主張ができるようになり、夫や子ども達からこの頃勇ましくなった、などと評されるようになるのである。

夫との関係が変化すると、夫も自分の職場での人間関係や夫の父親との関係が変化してくる。

それぞれに良い意味の自己主張をする事で、今までの関係の在り方が変わってくるのである。

A夫の担任がCoの知っている先生となった事から、CIの担任や学校に対する態度が変わってくる。先生の指示を待ち、その指示に従うようになる。今までは、そっとしておくことが一番よいことだと思っていたのであるが。その結果、修学旅行には参加できた。しかし、A夫のもつ問題は、もう少し根が深く、まだまだ家族の中で解決しておかなくてはならない問題があったのである。そのひとつは、この家族が一緒になって暮らしているというまとまりが出る事である。それにはまずこの夫婦がよりを戻す事であった。

家族がバラバラで、まとまりを欠いていた

のが、A夫の進路の決定を巡って、家族全員が心配して、一緒に考えていこうとする態度が現われてきた。A夫は相変わらずプライドが高く、現実路線には乗りにくいだが、一応選択すべき崖っぷちに立たされたときみずから決定する事ができた。

まだ、A夫とCIの関係は未熟なままに残されてはいるが、父親との信頼関係が修復された事が、とりあえずはA夫の登校を導く事になった。この時点ではCIの選ぶ自立の方向が十分に定まっているとは言えないが、A夫が登校することになって落ち着きの出ることが期待されるので、この一家にとって再び誤った方向へ進むおそれは少ないと信じている。

V まとめ

思春期の登校拒否の少年について、中学校2年の7月から中学校3年の3月までの治療の経過を報告した。この事例では、登校拒否をする少年自身は一度もカウンセリングを受けにくることができず、もっぱら母親に対してのカウンセリングが行われた。

この事例の家族にはそれぞれ問題があった。CIである母親は、若くして結婚し、ほとんど体一つで夫の家に入った。その形態からして、やや不自然であった。結婚して子どもができたにもかかわらず、母親らしい事もしてやる事ができないままに過ぎた。優しい夫はその父親に頭が上がらず、家の中の物一つCIの自由にならなかった。CIは自分の欲求はすべて心の奥に抑圧して、周りの言うままに動かされて表面的には波風が立たずに経過した。

長女が中学校3年になって、激しく親に反抗し始めた。父親は家庭の煩わしきからであろうか、職場に逃避してしまい、長女との対決は、もっぱら母親に押しつけられてしまった。親としての自覚に乏しく自立していない母親は、ただ混乱しておろおろするのみであった。夫婦の関係は最悪であり、だれもが自分のことのみに気をとられている時、A夫の登校拒否が始まった。A夫の中学1年の時で

ある。

すでに母親は夫に頼りたいとは思わないほど、その関係は悪化していた。A夫は学校へ行けなだけで、親に対する反抗は少なく、外出もでき、友達とも交遊できた。しかし、A夫は自分の考えをほとんど言わず、何を考えているのか分からない状態が続く。

長女は高校へ入ると落ち着き、活発に行動し始める。一方、A夫の欠席が始まって10か月後から母親に対するカウンセリングが始まった。

CIである母親は次第に自分の意見を持ち始め、今までの結婚生活を振り返るようになる。17年間は空白であったと思えるほど、母親にとっては空しい気持ちが沸いてくる。家族のためにだけ生きて来て、自分がなかった、子育てが終わったら自分は何をしたら良いのか、何か人のためになることで自分の生きがいになることがしたいと模索するようになる。

CIのこうした心の変化にともない、家の中での発言が多くなり、次第に自信が出てくるようになる。それに啓発されて、夫もその立場に目覚め、夫の父親と対決し、その地位が逆転する。

家中が今までのやり方を変化させてくると、A夫も母親に甘えるようになる。しかしその表現は、小さい子供のそれとは異なり、母親にはますます理解できないように思えた。

CIは自分自身もその母親から母性的な養護が得られなかったと思われる成育歴を持つ。そのため自分の子供の養育に当たっても母性的な関係が乏しく、十分なスキンシップが得られないままにA夫は成長したと思われる。しきりに母親らしい愛情を求める発言があってもCIはそれに応えることができない。

子どもの好きなようにして良い、という表向き寛大な態度が、実は親らしい判断ができない母親の無策の裏返しなのである。

親としての在り方に先に気づいた父親が、A夫との関係を修復して、徐々に一家がまとまってくるようになった。

A夫は一方で母親の愛情を求めながら、そ

の一方で父親や姉との会話を交わす事が自然にできるようになる。中学校3年の担任が母親との信頼関係を造り上げたうえで、暫時登校刺激を加えて、A夫は修学旅行に参加したり、2か月少々ではあるが登校できたりした。その後、A夫のプライドが高過ぎる事もあって、期末テストになるとまた欠席が始まるが、卒業後の進路を決める時期になると、担任の適切なアドバイスを得て、進路を選択できた。

A夫は自立していない母親から、人並みのしつけをしてもらえず、プライドばかり高くなり、自分の能力に対する過信を修正することなく思春期を迎えることになったのである。

思春期の発達課題は、両親——特に母親——からの分離と子としての自立、自己概念の確立、同性同年輩の友人との密接な交流を通しての他者愛の能力を発達させること、異性愛を可能にするための性的同一性の基礎づくりである。A夫の場合まず母親からの分離、という点でつまづいていたため、子としての自立に至らず、自己概念の確立は成されず、肥大した自己像が、自我に脅威を与えているため登校できなくなったものであった。

長い準備期間を経て発症した登校拒否は、少しばかり環境が変わったり、両親の対応が変化した程度では立ち直りは期待できない。この事例では、A夫が登校拒否を始めて2年半、母親のカウンセリングを始めて一年半、60回のカウンセリングを重ねて、やっと立ち直りの目途が立ったように思われるのであった。

登校拒否をしているA夫には一度も会うことがなく、母親に対するカウンセリングによって母親がまず自立をし、その結果A夫の登校拒否が克服に向かったという事例である。

参考文献

- 学校教育相談 登校拒否・気になる三つの傾向
ほんの森出版 1994
- 悠 登校拒否へのアプローチ ぎょうせい 1993
- 現代のエスプリ 学校に行けない子供たち
登校拒否再考 至文堂 1988
- 児童心理 登校拒否の心理と指導
金子書房 1990
- 稲村 博 登校拒否の克服 新曜社 1988
- 稲村 博 不登校の研究 新曜社 1994
- 河合 隼雄 大人になることのむずかしさ
岩波書店 1983